

菊陽人 りさーち



あらまき さとし
荒牧 慧至くん
(11歳・三里木北)

- 趣味 サッカー
- 将来の夢 サッカーでワールドカップに出ること
- 自慢できること サッカーで6年生の試合に選ばれたこと
- みんなに伝えたいこと 元気に暮らしてください

掲載を希望する人は、はがきか電子メールに「氏名」「年齢」「住所」「連絡先(昼間)」を明記し、〒869-1192 菊陽町役場総合政策課 sogoseisaku@town.kikuyo.lg.jp までお送りください。
(注)掲載対象は、小学生以上で菊陽町に居住している人に限ります。親子、祖父母と孫など2人1組での掲載もできます。掲載が決まりましたら、こちらからご連絡します。



そのむら けいた
園村 啓太くん
(11歳・新山)

- 趣味 野球
- 将来の夢 甲子園に出ること
- 自慢できること 水泳
- お父さん・お母さんに伝えたいこと 長生きしてください

人権のひろば

子どもの目、子どもの声
人権
作文シリーズ
【No.60】

問い合わせ
人権教育・啓発課
☎232-2113

◇印からの文章は、先生のコメントです。

水俣から学んだこと

菊陽西小学校 6年 赤星明日翔

わたしは、水俣病について学習して、一番に「ひどい」と思いました。かん者さんや水俣市民への差別。チソン工場が流した水銀をふくむ工場はい水。同じ人間や他のたくさん生き物が死んでいたり、苦しんでいるのに何もしないのはおかしいです。ひどいです。
病気になるったかん者さんだけでなく、かん者さんの家族もつらい思いをしてきたと思います。もしも、わたしが家族だったらかん者さんを救うこともできずにいて、とてもたえられないです。
語り部さんのお話を聞いてお父さんも、自分も、子どもも水俣病のしようじょうがでて、お父さんは、なくなってしまうたと言われました。つらいと思いましたが、かたがベロンベロンになるまで子どもにふんでもらって、それでもいたみがとれなかつたそうです。苦しなかつたと思います。でも、病気のいたみだけではない、差別をうけた苦しみはもつとひどかつたのです。
今、自分のくらしをみつめ直してみると、わたしは、たまに人によってちがう態度になつているなあと思つています。これは、水俣病の人にしては差別と似ているかもしれない。それに、わたしは悪口やかげ口を言つている人がいるのに注意ができませんでした。これも、見て見ぬふりといつしよです。
女子だけの話し合いの時に、友達がかげ口を言つていた人に「いけないと思うよ」と言つてくれました。この時、わたしはよかつたと思つていました。友達が勇気を出して言つてくれたから解決することができました。なんとなく水俣病に対する

る差別と似ているなあと思つています。わたしは、心の中でおかしいと思つていても言えないことがあります。たぶん、水俣の中にもそんな人がいたんじゃないかと思つています。言つたら自分が差別されるかもしれないと思つ、言えなかつたのだと思つています。
水俣は、今、きれいな海が広がつています。それは、勇気を出してうたえた人がいたからです。わたしもその人たちみたいに、自分のくらしのためにおかしいことは「おかしい」と言つていかなければいけないと思つていました。そして、正しいことをきちんとかちめていこうと思つています。



▲学校の友達と一緒に

◇水俣で差別に立ち上がった人々の行動から、自分のできることをしっかりと考へ、少しずつ学級の中で行動することもできています。

人権ってなあに シリーズ④ 教科書から「土農工商」が消えた？

今回は、具体的な事実や歴史を学んでみたいと思つています。
皆さんは江戸時代の身分制度についてどのように学習してきましたか。以前の

教科書では、身分制度について、いわゆるピラミッド型の縦の構造で学んでいました。現在では、このような縦型の身分制度は見直され、「武士と百姓・町人」そしてそのほかの身分の人がいました」と並列的に記述されています。知つていましたか。
そのほかの身分の中には、室町時代から歴史に登場する河原者と呼ばれる人々もいました。死んだ牛馬を処理する権利を持ち、皮を河原でなめし太鼓や履き物などさまざまな物に加工しました。また、石や木を巧みに配して庭園を造つたり、井戸を掘つたりする仕事に従事する人もいました。
彼らは、自然を変えたり、死に関わるというところで、ケガレと触れるとして差別されました。ケガレとは地震や洪水のような天変地異や死、出血など、それまでの状態に変化をもたらす力と考えられていたのです。鉄の農具を直す鍛冶や布を染める染色など、化学変化を使った高度な技術もケガレに触れるとされました。これらの人々は社会や文化を支える大事な役割を果たしていましたが、住む所や服装、ほかの身分の人々との交際の制限などの差別を受けました。このような差別は、幕府や藩の支配に都合良く利用されました。



祭りなどに欠かせない太鼓には革が張られています。牛馬の皮はさまざまな行程を経て革になります。太鼓作りの人々は水が豊富な河原の近くに住み、優れた技を磨いていきました。

きくよう文芸

菊陽句会報

想ふ事形に仕上げ冬帽子	井 子文	日溜まりに体あずけて冬すみれ	宮川ユキエ
着ぶくれて笑いの絶へぬ熱女連	財津 早雪	剪定のとどきし旧家庭灯り	日高 妙子
咲き染めし梅の吐息に佇みぬ	原野レイ子	四温晴何んで諍ふ馬の声	曾我 育代
白梅の花びら飛んで空の青	カ 幸子	極寒や晴着の震へ式帰り	曾我トモ子
低く見ゆ金柑の実の枝高し	寺尾千代子	鳥雲に無口な叔父の兵日記	紫藤 祥子
水仙の香りを揺らしローカル線	高橋 孝子	膨らみて風に重たし枝垂れ梅	村上 朋子
オリンピックこの雪移動させたくて	福田 貴子	短日も愚直に生きむ老いの道	野口 令史
密集む朝からごころう蜂達よ	佐藤 健	聞こえくる夕焼け小焼け日向ぼこ	松橋 強
梅開く百年経らししわの掌を	佐藤 節	賑々と干柿甘酒初句会	藤本 純子
風の中早梅凜と香を放つ	吉野 早苗	また翳る咲くをためらふ梅の庭	佐藤 澄世

短歌会

波うちてビニールハウス煌めけり歌よむ友も働きおらむか
立春を過ぎても続く寒さなりフルーツトマトの収穫わずかか
土ながら掘りて持ち来し露の曇春一番と妻の掌にあり
水淀む水面に映る蠟梅は美しかりき風に揺らぎて
冬晴れの空を流るる白き雲草原を走る群羊の如し
為すことは数多あれどもあれこれと迷うのみにて一日過ぎたり
母と見し梅はひらりと舞い散りぬあの日の姿未だ忘れず
蠟梅を手折りて床に生けたれば春立つ香りの茶室に満ちたり
まだ明けぬ池を飛びたつ鴨待ちて古きがままの狐をすらし
乙女座の星影淡き暁を鋭く細く月並び輝る

今村 貞子
梅田 國雄
河北 幸一
菊川あさみ
佐藤せい子
下田 久子
中村トシエ
松岡富紀子
山川 カヅ
松本 東亜